

関西学院大学の授業改善への取組 ～授業評価の仕組みとFD活動～

村田 治

(関西学院大学経済学部教授・教務部長)

はじめに

本稿は、関西学院大学（以下、本学と呼ぶ）がここ数年間取り組んできた授業改善とFD（ファカルティ・デベロップメント）活動の経緯と成果を整理したものである。後に詳しく述べるように、本学の授業評価およびFDの歴史は長く、一九九二年に総合教育研究室で行われたのが最初である。その後、二〇〇二年度に教務委員会の下にFD（ファカルティ・デベロップメント）部会が設置され、二〇〇五年度に全学一斉の統一方式のマークシート形式による授業評価が行われた。同時に、二〇〇六年三月に、『FDハンドブック 授業

改善のエッセンス』が発行された。

本稿では、これらの一連の取組を整理するとともに、学内での議論を踏まえながら、本学のFDへの取組の姿勢や授業評価のあり方等について考察するものである。

一 全学一斉の授業評価導入の経緯

本学の授業評価への取組は、一九九二年まで遡ることができる。一九七〇年代の学園紛争の後、総合教育研究室（以下、総研と呼ぶ）が設置され、研究プロジェクトの一環として、授業評価の方法が研究対象として取り上げられた。具体

的には、一九九二年度秋学期から、一三項目の質問票による授業評価アンケートが提案され、教員が任意に参加する形が取られてきた。一九九二年度秋学期から二〇〇四年度秋学期までの参加教員は一学期平均で一〇〇名弱であった。

次に、全学的な動きについて述べよう。総研による長年の授業評価やFDへの取組を受けて、二〇〇一年七月の教務委員会において、FDおよび授業評価について検討・実施する組織を設置することが議論され、二〇〇一年一月の教務委員会において、二〇〇二年度から教務委員会の下にFD部会を設置することが決められた。同時に、ネット上で授業評価が行えるように、授業評価についての質問項目がネットシラバスに追加された。

二〇〇二年度の第一回、第二回FD部会において、授業評価に関するガイドラインを作成し全授業担当者に配布することを決定した。このガイドラインにおいては、授業評価は「授業をより活性化し、担当者と学生の距離を縮めるとともに、学生の声や反応を授業にフィードバックして生かす目的」で行われ、その方法としては、「オンラインによる授業評価（中略）」、自由記述のコミュニケーション・ペーパー、ミニッツ・ペーパー（授業の終了直前に疑問や感想を書かせる形式）のほか、学期末のアンケート

（記名・無記名）、学部や科目独自のフォーマットの利用、総合教育研究室の授業アンケートの利用などが提案されている。さらに、評価結果に関しては、「担当教員のみが知ることができるもの」と位置づけられた。続いて、第三回FD部会において、「期間を定めて全学一斉に授業評価を行うこと」が提案され、二〇〇三年三月の教務委員会において、二〇〇三年度から春学期、秋学期に各一回全学一斉の授業評価を行うことが決定された。あわせて、二〇〇三年度からFD月間を設けることも了承された。

しかしながら、二〇〇三年度の全学一斉の授業評価の実施割合は極めて低いものであり、授業の改善を促すために、授業評価の公表も含めて新たな仕組みを模索する必要が生じてきた。この二〇〇三年度の授業評価の実施率の低さとFD月間での成果を受けて、二〇〇四年二月のFD部会において、授業評価の結果の公表について検討を開始することが了承された。あわせて、教授法マニュアル（後に、FDハンドブックと改名）の作成が決められた。これを受けて、二〇〇四年度のFD部会および数次の教務委員会で検討が行われ、最終的に、二〇〇四年二月の教務委員会において、全学的な授業評価導入の可否、実施方法等についての判断を大学評議会にゆだねることが了解された。こ

れを受けて、二〇〇五年一月の大学評議会において、全学一斉の授業評価の導入と教員からのフィードバックの学内への公表が了承された。

二 FD月間の活動

このようにして、全学一斉の授業評価が導入され、授業評価に対するコメントを学生にフィードバックする制度が構築されたのである。二〇〇一年一二月に、教務委員会の下にFD部会の設置が決められてから三年を費やしたことになる。この間、二〇〇三年度から二〇〇五年度にかけて行われたFD月間の役割は、全学一斉の授業評価の導入と教員の学生へのフィードバックの実施において重要な役割を果たした。本節では、このFD月間について述べていきたい。

まず、二〇〇三年度は春学期、秋学期ともにFD月間の開始年度とあって、講演会、オープン授業、学生へのアンケート調査を実施した。また、春学期、秋学期ともに、授業担当者はFD月間中に授業評価を行うことにした。春学期の講演会は教務部と総研の共催により、池田輝政名古屋大学高等教育研究センター教授(当時)を講師に迎え「FDによってどんな効果を挙げるべきか?」というテーマで行っ

た。また、オープン授業については、二四名の教員の参加があった。さらに、学生に対しては、「この授業のこういうところがお薦め」というアンケートを行った。この他、生協書籍部にFD関連図書フェアの開催を依頼した。秋学期のFD月間については次のような取組を行った。まず、講演会に関しては、吉田文メディア教育開発センター教授が「FDが大学教育を変える」というテーマで講演会を行った。また、春学期同様にオープン授業を行い、学生に対しては、「この授業のこういうところがお薦め」「こんな授業をして欲しい」などを尋ねるアンケートを実施した。特に、学生に対するアンケートについては、ゼミに所属している学生には、ゼミ担当者から配布・回収をお願いするなど回収率の向上に努めた。この二〇〇三年度の学生へのアンケート結果から、学生から見えて面白い授業を抽出し、後に述べる『FDハンドブック 授業改善のエッセンス』のIV章「私の授業を紹介します」へと発展させたのである。

二〇〇四年度においても、二〇〇三年度と同様に、講演会の開催、オープン授業、FD月間中の授業評価の実施等を行った。春学期の講演会については、溝上慎(京都大学高等教育研究開発推進センター助教(当時)を講師に迎え、「FDのあり方再考—学生をどのように育てたいか—」とい

うテーマで行った。秋学期についても、オープン授業、FD月間中の授業評価の実施等を行った。また、教員と学生の双方が参加するシンポジウム「授業をよりよくするため— 学生の視点と教員の視点—」を開催した。あわせて、生協書籍部でFD関連図書フェア開催の依頼を行った。

二〇〇五年度春学期においても、オープン授業や生協書籍部でFD関連図書フェアを開催した。秋学期は、授業を活性化させるため、授業評価と平行して、「授業を企画」するという趣旨により、学生参加型のFDコンペとFDラウンドテーブルを実施した。FDコンペは「学生の企画力を活かして、新たな授業を提言するために」をテーマに取り上げ、また、ラウンドテーブルでは「これからの授業改善のために」をテーマに全体会として活発な討議がなされ、予想以上の成果を挙げた。また、二〇〇五年度からは、マークシートなどの統一形式による授業評価が実施され、九九・一%の実施率となり、啓蒙的な役割であったFD月間はその役割を終え、二〇〇六年度からは実施されていない。

三 授業評価の仕組み

本学の全学的な授業評価の導入の経緯は前述のとおりで

あるが、以下では、全学的な授業評価の仕組みについて述べよう。第一節でも見たように、本学の授業評価の目的は授業の改善のために行うものであり、教員の授業の評価それ自体を目的としたものではない。この点を考慮して、マークシート形式による質問票と自由記述形式を分離して、学生による自由記述形式の回答については、直接、授業担当教者の手元に戻される仕組みを取っている。自由記述形式の調査票の質問項目は次の三点である。

- ①この科目でよかったこと
- ②この科目で改善を要すること
- ③一般的な批評、意見、提案

また、マークシート形式の調査票の質問項目は図1を参照されたい。さらに、マークシート形式の質問票については、総研による全国の大学への調査を受けて、かなりの時間をかけて絞り込んだ質問項目になっている。具体的には、全国の三三三大学に調査票に関するアンケートを行い、二一七大学から回答を得、これを基に、これまでの研究プロジェクトの成果を踏まえながら一〇項目に絞り込んだものである。マークシート形式による学生の授業評価に関する集計は総研が行い、データそれ自体を学内にも公表することはしていないが、授業担当者には個別科目の調査結果を

図 1

授業に関する調査
調査主体：関西学院大学教務部

この評価は本学における授業内容を一層充実させ、教材や教授法を開発するための資料にのみ使用するものです。記入にあたっては授業の全体を視野に入れた上で、責任ある評価が求められています。あなたの意見が改善を促すの機会を大切にしたいです。なお、この評価票の内容があなたの成績に影響することは一切ありません。

所属学部 神 文 社 法 経 理 薬 理 他
0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

科目等履修生、聴講生の方は、他にマークしてください。

学年 1 2 3 4 他 性別 男 女
0 0 0 0 0 0 0 0

科目名

【注意事項】
①この用紙は絶対に汚したり折り曲げたり、所定以外のところへの記入はしないでください。
②マーク例
良い例 悪い例
● ○ ×

授業への出席状況を下の(a),(b),(c)のグループから選り右の欄にマークしてください。

(a) 1学期 週1回開講の授業の場合 (イ)全回出席 (ロ)1~2回欠席 (ハ)3~4回欠席 (ニ)5~6回欠席 (ホ)7回以上欠席	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
(b) 1学期 週2回 又は通年週1回開講の授業の場合 (イ)全回出席 (ロ)1~4回欠席 (ハ)5~8回欠席 (ニ)9~12回欠席 (ホ)13回以上欠席	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
(c) 1学期 週3回開講の授業の場合 (イ)全回出席 (ロ)1~6回欠席 (ハ)7~12回欠席 (ニ)13~18回欠席 (ホ)19回以上欠席	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>

以下のそれぞれの項目について、右のような五段階評価に従って最も適切な欄にマークしてください。この授業に該当しない場合、あるいは不明の場合は、右端の欄をマークしてください。

②私はこの授業に積極的に取り組んだ。	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
③この授業の学習目標ははっきり示されていた。	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
④毎回の授業はおおむねシラバスにそって進行していた。	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
⑤担当者の話し方は聞き取りやすかった。	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
⑥授業で要求される作業量(リポート、宿題、自習など)は適切であった。	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
⑦内容がよく理解できるように授業方法の工夫がなされていた。	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
⑧授業担当者の授業に対する熱意を感じた。	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
⑨この授業を受講して、自分にとって新しい知識(技能)や物事の見方が得られた。	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
⑩私は全体としてこの授業に満足している。	<input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>

返している。授業担当者は、このマークシート形式の調査結果と手元にある自由記述形式の評価を考慮して、

① 学生の評価に対してのコメント

② 今後の改善点についてのコメント

の二点について学生へのフィードバックを義務づけている。授業担当者からのこれらのフィードバックはWeb上で学内の学生・教職員に公開されている。また、学部ごとや授業形態別の集計データについては、

① この授業の学習目標ははっきり示されていた

② 毎回の授業はおおむねシラバスにそって進行していた

③ 担当者の話し方は聞き取りやすかった

④ 授業で要求される作業量(リポート、宿題、自習など)は適切であった

⑤ 内容がよく理解できるように授業方法の工夫がなされていた

⑥ 授業担当者の授業に対する熱意を感じた

の六つの質問項目を選びリーダーチャートを作成し、あわせてWeb上で学内に公開している。

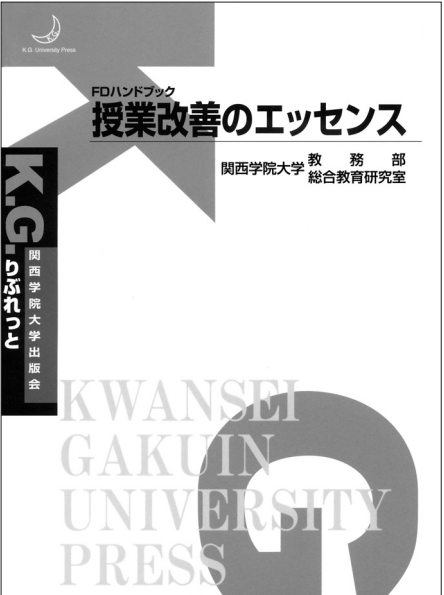
このように、本学の授業評価の仕組みの特長は、マークシート形式と自由記述形式の分離、授業担当者からのフィードバックの公表等が挙げられるが、同時に、次に述べる。

『FDハンドブック 授業改善のエッセンス』の発行も大きな特長と言えます。

四 FDハンドブックの発行

『FDハンドブック 授業改善のエッセンス』(図2参照)の発行については、第一節でも述べたように、二〇〇三年度のFD月間でのアンケート調査の成果を受けて、二〇〇四年二月のFD部会において発行が認められたものである。

図 2



教務部内に編集委員会を設け検討し、二〇〇六年三月に漸く発行にこぎつけた。この『FDハンドブック 授業改善のエッセンス』は関西学院大学教務部と総合教育研究室が発行元で約七〇ページからなり、その構成は次のようになっている。

はしがき

I. FDを考える前に―教室という空間

II. 授業を作る5つのステージ

III. 教員のアンケート結果から見た関学の授業

IV. 私の授業を紹介します

V. 「授業に関する調査」の調査項目について

参考資料

編集後記

まず、「I. FDを考える前に」ではFD全般についての紹介や米国高等教育学会の「優れた授業のための7つの原則」等が示されている。「II. 授業を作る5つのステージ」では、授業の準備からシラバスの書き方、授業の組み立てと運営、学生の理解を支援する方法、授業の自己点検、授業の評価と改善についてなど、具体的な項目ごとに分け

て授業改善のためのヒントが示されている。

「Ⅲ、教員のアンケート結果から見た関学の授業」では、「授業の特色」「学習目標」「授業での工夫」「学習者とのコミュニケーション」「プレゼンテーションの工夫」「メディアの利用」「失敗例」「授業時間外の学習」「合格点の目安と評価方法」の九項について、本学の授業担当者へアンケートを行った結果を集計し、具体例が示されている。次の「Ⅳ、私の授業を紹介します」では、二〇〇三年度に行った学生へのアンケートの中から評価の高かった授業の担当者、具体的な授業の工夫を紹介してもらっている。その際、人文科学、社会科学、自然科学等の分野にも配慮をして紹介している。最後の「Ⅴ、「授業に関する調査」の調査項目について」は、第三節で述べた授業評価の項目の説明がなされている。さらに、「参考資料」では、一九冊の書籍を選び、目次と内容の要約を行い、独自の三段階評価を加えて紹介している。

このように、この『FDハンドブック 授業改善のエッセンス』は、学生による授業評価を受けた後、どのように授業の改善を行っていけばよいかという指針を与えてくれるように構成されているのである。まさに、全学一斉の統一方式による授業評価の補完的な役割を果たすように作成され

たものである。

おわりに

以上、本学の全学一斉の統一方式による授業評価導入の経緯、さらに、その過程でのFD月間の果たした役割、授業評価そのものの仕組み、授業評価の補完的な役割を果たすFDハンドブックの内容について述べてきた。しかしながら、これでもって本学のFD活動が十分であるとは考えてはいない。今後は、授業評価によって得られた学生の批評に対して、授業をどのように改善していくかという具体的なFD活動が求められる。この点を考慮して、二〇〇七年度の第一回FD部会においては、各学部のFD委員会等に授業改善のための研究会を開催することの検討をお願いし、教育の現場での改善の取組をより強化していくよう提案している。また、今後は、授業評価指標の改善目標の設定等も考えていかねばならない課題であろう。前述したように、全学一斉の統一方式による授業評価の導入には三年間という時間を費やした。ゆっくりではあるが、着実に授業の改善への歩みを進めて行きたいと考えている。